

2022 年度 【 就労・日中 】 支援部会報告

部会テーマ【 自分たちの支援を高めるために 】

部会開催	今年度の支援部会は、コロナウイルスの影響で開催できませんでした。
	●事例検討会（11/5） 「 障害のある人を中心に置いた支援とは ～事業所間連携とそれぞれの役割～ 」 ※就労・日中部会から 20 名が参加しました。
情報・意見交換の内容	

2022 年度 【 入所・グループホーム 】 支援部会報告

部会テーマ【事業所間連携を図り、支援力の向上につなげる 】

部会開催	○世話役会議（5/23、7/1、7/14、8/19） ・2022 年度の方向性確認、部会内容確認 ●第1回部会：テーマ「暮らしの場」から関わる理想の支援って？（8/30） ・3グループに分かれて支援者が考える理想の支援とはどんなものなのかを話し合った。 参加者 18 名 ●事例検討会（11/5） ○世話役会議（10/28、2/9） ・前半期の振り返り、後半期の活動について ●第2回部会：テーマ「ようこそグループホーム部会へ～何でも聞いてみましょう～」(3/16) ・2022 年度に立ち上げられた事業所 5 か所が集い、情報共有を行なう。 参加者 未定 名
テーマについて深めた点	コロナ禍における入所・GHの暮らしの場の情報共有 利用者や職員の感染症対策、余暇活動の過ごし方などを共有した。 オンラインを取り入れることにより、コロナ禍で安心して参加しやすい環境を作り情報共有に努めた。 ・利用者が安心して過ごせる住居・暮らしの場づくり 近所づきあい、世話人さんとのコミュニケーション、家族との連絡体制、自立支援と援助の線引き、防犯カメラの利用方法、日中活動との連携など
部会のまとめ	○事業所間連携 ・昨年度に引き続きコロナ禍であるからこそ、入所・GHの情報共有が必要とされた。また、「暮らしの場」であるからこそ、閉所できない「家」をどのように運営していくかどのように利用者の生活を守るかが話題となった。オンラインであるからこそ参加できる事業所もあり、新しく立ち上げた事業所も散見され、事業所間連携し共同して支援の質の向上を図る。 ○高齢化への対応 利用者の高齢化について、従来の支援とは異なる支援の必要が生じている。介護施設との連携も求められるが、高齢障害者が安心して生活できる施設が求められている。一方で、長期入院からの地域移行や一人暮らしにむけて、段階的な支援が必要である。 ○現制度のグループホーム体制では退去とならざるを得なかったり、受け入れ困難となったりする状況がある。グループホームの支援者の質の担保を行なうために研修制度などの導入が必要である。また重度障がい者に対応した施設や制度が必要である。 ○経済的に自立できる制度 家族からの援助や生活保護に頼らず、本人が自立的に生活できる水準に障害年金を引き上げることが必要である。

2022 年度 【地域生活】支援部会報告

部会テーマ【 部会を通して事業所間の横のつながりの強化 】

部会開催	○世話役会議（6/16） ●第1回部会（8/4） 参加者 0名 ・テーマ「自分の潜在能力」について開催予定であったが、コロナ蔓延状況と、事務局友政のコロナ罹患により、開催は延期となった。 ○世話役会議（11/26） グループラインで開催 ●第2回部会（1/26） 参加者 6名 ・部会長山口氏が濃厚接触によって欠席となったため、急遽、事務局でテーマ設定と司会進行を行った。
テーマについて深めた点	<u>1. ヘルパーを始めたきっかけや動機について</u> ・精神障害者と直接関わりたい ・元々看護師を目指していて、そのトレーニング目的で16歳からヘルパーを始めた ・母の介護 ・知人から誘われた ・もともと就労で勤務していて、収益配分に不満があったため独立した ・施設で勤務していたが、作業としての側面が強く、もっと人と人との関りがしたかった <u>2. しんどくなったとき、どうしているか</u> ・利用者に正直に伝えて、利用者に頼ってみた。 ・次の日に持ち越さない。 ・曜日を決めてお酒を飲んでいる。 ・しっかり睡眠をとる。 <u>3. 事業所としての課題</u> ・求人が難しい。 ・サービス提供のスケジュールリングが困難。登録ヘルパーとの稼働可能時間の調整が困難。 →事業所間の連携を強化することで、登録ヘルパーの稼働率を上げることが出来る。 <u>4. 今後のビジョン</u> ・業界をもっと盛り上げていきたい。一時期の就労系のように一般企業がおおいさを感じて参入したくなるようなイメージ戦略を打ち出していきたい。 ・ヘルパーのおしゃれができる職場にしていきたい。会社に掛け合ってピアスとネイルができるようになった。おしゃれをすることは自身の価値を高めるための投資であり、自身の価値が向上することで職務に対する意識も高まり、結果、利用者にとってもサービス価値提供の向上につながる。また、おしゃれを高めたヘルパーが訪問することで、精神的な高め合いにもなる。「一律にこうであるべき」の福祉イメージを良い意味で打破したい。 →おしゃれは身だしなみを意識するための刺激となるため、その刺激が自立支援のために効果がある利用者には良質の促しになる。その刺激が苦手な利用者には、別のヘルパーで対応すればいい。ヘルパーのカラーを打ち出すことで利用者との相性も事前に判断しやすくなる。 ・訪問介護で組織としての基礎固めをして、事業展開を目指したい。収益向上を目指して、登録ヘルパーに還元することでモチベーション向上を目指す。
部会のまとめ	ヘルパー業界は、きつい、難しいというイメージが強いため、そのイメージを打破するため、参入したくなるような新しい流れを、横のつながりを強化しながら作り上げていく。東大阪からの事業所の初参加もあり、事業展開を応援し合えるような関係性を、この部会を通して作り上げていきたい。

2022 年度 【障がい児】支援部会報告

部会テーマ【自分たちの支援を高めるために】

部 会 開 催	○世話役会議/) メールやりとりにて打ち合わせ ●第1回部会(7/1) 参加者23名 ・事業所の近況報告 ・学校との連携について(不登校問題をベースに)
	○世話役会議(12/15) ●第2回部会(1/17) 参加者22名 ・支援コーディネーターの活動について(話題提供として) ・学校との連携について思うこと(グループワーク)
	○世話役会議(/) メールやりとりにて打ち合わせ ●第3回部会(2/2) =研修 参加者25名 ・大阪府ペアレント・メンター事業を活用した講演会 「一緒に子育てするチームになってくれますか？」 ※ペアレント・メンター事業とは、発達障害のあるお子さんを育ててこられた先輩保護者である「ペアレント・メンター」が、子育てに関する経験談の紹介や、親目線での情報提供等の活動を通して、発達障がいのあるお子さんがいらっしゃるご家族をサポートされています。
テ マ に つ い て 深 め た 点	・不登校の障がい児童はふえており、放課後デイが子どもの「居場所」として機能している現状がある。不登校の一因として、周囲の子どもおよび教員による、障がい理解が不足している現状もある。各事業所でも、支援者・保護者・学校が会議等を実施して連携して対応を話し合うことで学校復帰を促す取り組みをしている。(例えば、子どもへの対応の統一をはかったり、デイでも学校の授業内容を把握し、プログラムを学校時間割に寄せるなどの工夫) ・連携促進のかなめとして、相談支援事業所が活躍することが必要ではないか？ (東大阪市では障がい児相談支援の利用率=デイ・児発の利用率だが、八尾市では相談支援を利用していない児童も多い。事業所数がおいついていない) ・学校との連携について、福祉側からアプローチをする際にハードルが高いように感じている(会議を申し入れても断られる等)事業所もあるが、送迎時に支援担当の先生と気軽に、上手に連携できている事業所もある(顔がみえる関係があるかなし)。支援コーディネーターの活動状況は学校により違いがあるが、今後に期待。
部 会 の ま と め	・児童発達支援、放課後等デイサービスが、子どもの発達支援に大きく貢献するようになっているが、社会的認知はまだ不足している。社会的な認知を高められるように事業所も努力していくし、行政にもフォローをいただきたい。 ・連携づくりも積極的に福祉サイドから声をかけていく。 ・連携づくりのために相談支援・学校の支援コーディネーターも活用していく。 ・虐待や愛着障がいのケースでは特に連携が必要。 ・事業所間の横の連携・情報交換を今後も継続していく。各事業所からの情報発信をこの場でしていく。